

備陽史探訪

第48号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL(0849)53-6157

邪馬台国論争史

副会長 山口 哲晶

今からおおよそ一八〇〇年前、邪馬台国といふ国があった。女王卑弥呼が都する所、邪馬台国は一体どこにあった、どんな所だったのかその手がかりとなるのは、三国志魏志東夷伝倭人条、俗に言う魏志倭人伝の約二千字ほどである。

邪馬台国の所在をめぐっての論争は今に始ったことではなく、古くよりこれまでに三度大きな論争があった。

一度目は江戸時代に国学が見直された時期で、その時、新井白石や本居宣長らが邪馬台国について論じ合っている。本居宣長は九州説を唱え卑弥呼は九州の女酋長であると言っている。邪馬台国が大和にあった場合、日本の皇室の前身という事になり、日本の朝廷(皇室)が中国に貢

物を持っていく様な事はあり得ないことで、邪馬台国は大和ではなく、九州の女酋長が持っていたのだといふ考え方である。

一方新井白石の畿内説は、日本の文化の中心は大和地方であるから九州ではないといふ。

次いで明治に入って京大の内藤虎次郎(湖南)の畿内説と東大の白鳥庫吉の九州説による邪馬台国論争が再燃した。それは、本格的な史料批判によるものであった。すなわち、

畿内説は魏志倭人伝記述の方位を九十度曲げ南を東として解釈し、邪馬台国を畿内とした上で、さらに領域を広く求め三世紀頃すでに大和政権によって北九州が支配されていたと、倭諸国を九州から遠江までに比定した。

一方九州説は方位を強調し、里数、日数の読み替えを行ない邪馬台国を九州に求め、三世紀頃の日本列島は邪馬台国連合ともいふべき政治体制の中で中国に朝貢し従属関係をもっていたが全日本的ではなく、九州に限られていた。さらに当時の大和地方には銅鐸の祭りを中心とする稻作農民が暮らしていたが九州まで支配力を及ぼす様な強大な政権は未だ形成されていなかったとした。

そして戦後東大派は九州説を京大派は畿内説をといふ流れの中で第三次邪馬台国論争が華々しく繰りひろげられて来た。特に京大系の考古学者が今もって畿内説を支持しているのは、九州にはこれまで大和の唐古遺跡に匹敵する様な遺跡がみつかっていないことや、卑弥呼が魏からもらったといふ三角縁神獣鏡が近畿に多い事、環濠集落や墳丘墓も近畿の方が優勢といふ考古学的成果をふまえて論証している点にある。

古くよりその所在を中心に論証されて来た邪馬台国問題は、今なお解決をみていない。その後の論争の過程で、邪馬台国問題は卑弥呼論、邪馬台国と倭諸国の社会構造、対外交渉など、単なる所在論から拡大発展し、今や邪馬台国を三世紀のアジア

公開討論会 「邪馬台国はどこだ」

(時) 一九九〇年七月二十九日

(日) 午後二時三〇分

(場所) 福山城「湯殿」

(会費) 無料

出席者

(畿内説) 山口哲晶

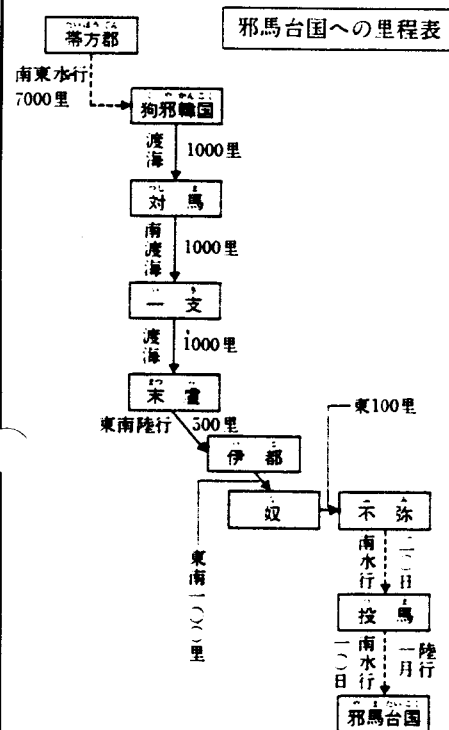
田口義之

(九州説) 出内博都

後藤匡史

注①邪馬台国に興味を持つ方なら誰でも参加、発言できます。
 ②終了後、恒例になりました夏の懇親会を催します。会費は男二五〇〇円、女二三〇〇円、場所はサントークビアガーデンです。参加希望の方は事務局まで御一報下さい。

の中にすえて論じる段階に到達したと言えよう。
 そして、邪馬台国の謎はさらに深まっている。
 (次ページに地図)



卑弥呼研究略年表			
年代	卑弥呼の比定	邪馬台国・他	文献
720(養老4)	(神功皇后)	(大和)	「日本書紀」神功皇后記
1339(延元4)	神功皇后説	大和	北畠親房「神皇正統記」
1688(元禄1)	神功皇后(気長足姫尊の転説)説	大和	松下見林「異稿日本伝」
1716(享保1)	神功皇后(卑弥呼=日御子)説	大和	新井白石「古史通感問」
1778(安永7)	熊襲偽僧説(卑弥呼は神功皇后をさすか、魏へ遣使したのは熊襲の男王)	九州(筑紫南方の熊襲)	本居宣長「服虔假言」
1908(明治41)	八女津姫(卑弥呼は姫子で固有名詞ではない)説	九州(八女国)	久米邦武「日本古代史」
1910(明治43)	肥後の女曾説(宗教的君主)卑弥呼は姫尊の転説で実名ではない 倭姫命説(男弟=景行天皇) 九州北部の一女曾説	九州(肥後) 大和 九州	白鳥庫吉「倭女王卑弥呼考」 内藤虎次郎「卑弥呼考」 橋本増吉「邪馬台国及び卑弥呼に就て」 古谷清「江田村の古墳」
1912(明治45)	熊本県江田船山古墳の被葬者説	九州	那珂通世「外交綱要」
1915(大正4)	熊襲の女曾説	九州	喜田貞吉「漢籍に見えたる倭人記事の解説」
1917(大正6)	九州地方の首長説	九州	笠井新也「卑弥呼即ち倭迹迹日百襲姫命」
1924(大正13)	倭迹迹日百襲姫命説	大和(筑後山門郡)	吉田不動彦「邪馬台国方位考」 肥後和男「倭姫命考」
1927(昭和2)	息長帯姫命説	大和	
1938(昭和13)	倭迹迹日百襲姫命説	大和	
1947(昭和22)	北九州の女曾説	九州	和田清「魏志倭人伝に關する一解釈」 藤岡生大「埋もれた金印」
1950(昭和25)	連合国家に共立された女王説(宗教的人物プラス政治力)	九州(筑後山門あたり)	

秋期一泊旅行 吉野ヶ里遺跡と名護屋城跡 への御招待

会長 田口 義之

昨年より話題に上っております九州吉野ヶ里遺跡の見学、いよいよ実施の運びとなりました。

今年二月の記念講演会では吉野ヶ里遺跡の発掘担当者、高島忠平先生をお招きして有意義なひとときを過ごしましたが、今度は実際に遺跡の上を歩いてみようというわけです。

吉野ヶ里遺跡の発見は、近年になり考古学上の大発見だと言われております。弥生時代の部落国家の跡が千七百年余りの眠りからさめ、突然人々の前に現われたのです。かつては魏志倭人伝でしかのぞくことができなかった弥生時代の「国」が発掘によって明らかにされたのです。望楼の跡ではないかといわれる建物跡集落のまわりをめぐる深い空堀、王の墓といわれる巨大な墳丘墓、実地に足で確かめてみましょう。

名護屋城跡は、豊臣秀吉が文禄、慶長の役で、朝鮮半島への基地とした近世初頭の城郭遺跡です。

その規模は雄大で、朝鮮出兵に従

軍した各大名の陣屋跡も明確に残り一見の価値ある史跡と言えましょう。特に見ていただきたいのは、城郭の作りです。この城郭は、文禄、慶長年間に築かれたあとは廃城となりほとんど人の手が加わっていません。現在各地には近世の名城といわれるものがたくさん残っていますが、そのほとんどは江戸時代になって修築されており、この点、名護屋城は安土桃山時代の貴重な城郭遺跡として注目されるわけです。

その他、柳川の川下り、太宰府天満宮の見学も予定しております。是非御参加下さい。

(委しくは別紙の要項を御覧下さい)



古墳めぐり 特集

親と子の古墳めぐり

浜田 和沙(小六)

「あれっ? 石棺が丸ごと全部外に出てる!」

今日「備陽史探訪の会」の人達と、駅家の奥の服部へ古墳を見に行きました。毎年五月五日に行っている行事で、私は今回で二回目です。

石棺が丸ごと全部出ていたのは、ちょうど飛鳥時代の古墳で「北塚古墳」という県史跡の有名な古墳だということなんです。家型石棺であまり大きくはなかったけど、なわをかけて運ぶために家の屋根みたいなところの後ろがへこんでいました。それと、その石棺のかべにあたる四枚の石の一つが北塚古墳の下の方にあるお堂を作るために二つに割って使っているそうです。私は、人のお墓の石を勝手に取って勝手に使っても昔は許されたのかな?と思いました。

次に行ったのは、「大迫古墳」です。その古墳も飛鳥時代の古墳でと

ても大きなものでした。人がたくさん入りました。中は広くて、かべに使われている石は、直径2〜3メートルもの大きな石でできた。この古墳も県史跡だそうです。

ここには父と一緒に来たことがあるけれど、初めて来たみたいに、いろいろな話をきくと一回一回うとずいたぐらいいです。この古墳も飛鳥時代のものだそうです。

次は、服部の大池まで三十分歩いてやっと昼食です。だいたい歩いてお腹も減っていたのでおにぎりはとてもおいしかったです。

次に行ったのは、「熊野権現塚古墳」です。ここは古墳の中には入れませんが、一つびっくりしたことがありました。それは古墳の上に小さなお宮(といっても横一メートル、縦一・五メートル)が立っていたことです。これも、昔だったら建ててもおかしくないのかな?と思っていました。この古墳は、古墳時代に造られたものだそうです。

その次は「宝塚古墳」に行きました。これも古墳時代のものです。

この古墳は、一番奥の石が大きくてあとは小さな石でできていました。小さな石はつめて造らないとくずれてしまうので、つめてつめてできていました。だから天上は丸くなっていました。でも大きな石を一つ置くよりもじょうぶだそうです。

次は孤塚古墳へ行きました。そこは、本当だったら平地みたいな所だったけど古墳を造るためにうしろの方の地面をけずってあるので急にへこんでいました。



この古墳は、古墳時代の後期に造ったものでした。二子塚古墳と同じ時造られたみたいです。

最後に行ったのは、「二子塚古墳」という前方後円墳です。大きな古墳で長さが約七〇〜八〇メートルくらい、幅が約四〇〜五〇メートルくらいあります。その奥の石は三〜四メートルあります。天上には、一びきのこうもりがぶら下がっていました。そして少ししてから外に出ました。すると、「また入りたい」という人がいたので、「これでおわりだぞ。」と言われたから、私たちも入りました。私は、何回入ってもあきないと思いました。

「へびが出てくるかもしれないぞ。」と講師の方は言われました。でもす

ぐ、

「入らないと勉強になりませんネ。私が一番に入ってへびにかまれましよう。入りたい人は、私の次にはいってくださいネ。」

と言われたかと思うと早口で、「おしりからはいって!」

と言われて、へびみたいに、おしりからシュルシュルとみるみるうちに入ってしまった。私と妹は、

「みんな入ってから入ろう!」と言い、みんなが入るあとをついて、おしりからはって入りました。何しろ高さが四〇〜五〇センチしかないの

で立って歩けるはずがありません。みんなうつぶせになって六・五メートル行くと、今度は飛んでもせがた

わないくらいの高さがある玄室に入りました。どの石も大きかったです。中は真つ暗で、かい中電灯をつける

とやっと見えるくらいでした。どの石も大きくて一番奥の石は三〜四メートルありました。天上には、一びきのこうもりがぶら下がっていました。そして少ししてから外に出ました。すると、「また入りたい」という人がいたので、「これでおわりだぞ。」と言われたから、私たちも入

りました。私は、何回入ってもあきないと思いました。

「へびが出てくるかもしれないぞ。」と講師の方は言われました。でもす

これだけの古墳を見て、どの古墳にも思ったことは、昔の人はあんな大きな石をよく運んだということですね。
来年もまた行きたいです。

こふんめぐり

浜田 依里子(小四)

「大きい石だな」

備陽史探訪の会の人たちと、服部のこふんめぐりに行きました。

まず、服部の永谷という所にある八幡神社に九時三十分集合して、せつ明のパンフレットをもらったり班べつに分かれました。そのあと會長さんや班長さんからお話を聞いて、いよいよ出発です。一班からじゅんばんに歩いて山に登りました。はじめに行ったのは、北塚こふんです。このこふんは、今から約一四〇〇年前に作られた家のような形をしたこふんです。

これを見て、よくこんなに大きな石を運べたな。と思いました。それから三十分くらい歩いて大迫こふんに行きました。このこふんも一四〇〇年くらい前のこふんです。

高さは私のせより三〇cmくらい高く、おくまで一〇mくらいありました。

ふつうは石と石をつみかさねると、すきまができるのに、このこふんの石は、すきまがあまりなかったので、

ふしぎに思いました。

その次に、服部の大池で昼食をしました。そして、一時に出発してごんげん塚こふんに行きました。

このこふんは、一四五〇年くらい前にできたこふんで、このこふんの石の上に小さな神社がたっていたので、おもしろいな。と思いました。

四番目に行ったのは、宝塚こふんで、このこふんも一四五〇年くらい前に作られたこふんで天じょうが、丸くなっていました。

一番おくの石が、大きくてあとはいさい石だったので、おもしろいな。と思いました。

そのつぎにきつね塚こふんに行きました。このこふんは、一四〇〇年くらい前のこふんで山のしゃめんに作られていました。

さいごに、二子塚こふんに行きました。このこふんも一四〇〇年くらい前に作られたこふんで、約九〇mくらいありました。なぜわかったかという、みんなで手をつないで、かっぺみたらからです。このこふんは前が四角で後ろがまるいので、前方後円ふんというのだそうです。

今日は、生まれてはじめてこふんめぐりに行だったので、びっくりするこばかりでした。それに、こふん

というのは、ずっとずっと昔の人のおはかだということもしりました。ひさしぶりに五kmから六kmあるいたので足がいたかったです。でも、今日はとてもいい一日でした。

城郭研究部会

行事予定

第四十二回中世を読む会

。七月二〇日 夜七時

。市中央公民館 二F和室

中世を読む会

リレー講演会

。八月十九日(日)

午後一時三〇分

。市中央公民館 第三会議室

。テーマ 備後の中世文書の

問題点

。会費 無料

☆問い合わせは事務局或は

出内(五五一〇五三五)まで

『親と子の古墳巡り』 に参加して

パート 2

猪原 安子

今回何と言っても印象深かったのは、最後に行った二子塚古墳。今回参加した人の半数ぐらいいは、これからは古墳と聞けばきつとこの二子塚古墳を思い出すのではないかと思うくらいです。

まずは前方後円墳の前方部の端から後ろの堀まで測量(?)です。さあみんな手と手をつないで、さて何人並んだでしょうか。はつきりとした数を聞き落としてしまいました。が、六〇名ぐらいいだったでしょうか、ざつと七〇〜九〇メートルと言ったところ、それでは地上はそれくらいにして、次は横穴式石室の方へ。

「石室があると言ったって入り口は埋まって中がどんな具合かちつとも分からないんだからな」と思っていますと、蛇が出るとか何とか講釈を垂れていた篠原講師が、さつと腹ばいになって狭い穴の中に吸い込まれるように消えて行ったのです。好奇心旺盛なやんちゃ坊主がそれを見てじつとしているはずがありません。その穴の中に次々と腹ばいになって

足から飲まれて行きます。女の子も大人もつい雰囲気につられて泥んこになるのも構わず入っていきます。

もちろん私もそろそろと足からめぐりこんだのです。この、足からと言うのが微妙な気分になります。

泥んこの所で腹ばいになることが、もう非日常的でしかも後ずさりをして暗い中に入っていくのです。幽霊でも何でもコワ〜イものは真つ暗な中、背後からやって来るもの。

なんだかワクワク・ぞくぞくするではありませんか。顔が地面にくっつきそうになりながら這いこんだのに奥は天井が高くて広いのです。不思議な感じです。感動に打ち震えつつ(そんな人も一人や二人はいらっしゃったでしょう)弥生が丘を下って近田の駅へ。自動販売機でジュースを買ったらありきたりの日常に舞い戻ってしまった感じ。

これは全く余談ですが、腹ばいの体勢をしてみても「匍匐(はふく)前進」と言う言葉を思い浮かべたのはたしてK氏だけででしょうか。

権現塚古墳。これが古墳とは知らなければ何ともないのかも知れませんが、古墳と見て見ると上に乗っているお社(やしろ)がこっけいに見えます。

宝塚、孤塚。古墳はお墓なんだけど、共同墓地が側にあるとそのほうを「あつ、お墓だ。」と思ってしまうのです。仏教が伝わるか伝わらないかの古い時代のお墓と、宗派が出そろった感じの共同墓地の現代のお墓。奇妙な取り合らせ。

ほかの古墳のことは誰かに聞いてもらうとして、わたしが見たもう一つのものは、お玉じゃくしです。当たり前のことですが、下見に来たときには服部大池は桜の季節で、そんなものはいなかったのです。ところが今日はお玉じゃくしがたくさん見えました。水面に近い方が暖かいからか、それとも酸素が多いからか、いたずらをして追っつてもしばらくするとまた岸近くへ寄って来ます。

のんびり日なたぼっこをしているのに驚かせてしまいました。(だけれどちよつと水面をさわっただけでさつと身をひるがえして逃げるのが面白い。可哀想であれでももある。)

振り返ってみると今回の古墳巡りは、お天気一つだけを取って見ても劇的でした。朝方の雨、雨。それに引き替え、昼からそして帰途につくころの打って変わった好天気。そしてクライマックスは二子塚。見事な盛り上がりで、コンサートなら興奮

覚めやらぬ観衆が拍手喝采心からアンコールを求めると言った感じという大変なとえででしょうか。

(一九九〇・五・六)

新刊案内

備南戦国史を彩った二人の武将、杉原盛重と藤井皓玄の本が八月刊行される。著者は立石定夫氏。

立石先生には過去この二人について講演や見学旅行でお話しただいており、会員諸氏待望の新刊といえる。

『神辺城と藤井皓玄』

立石定夫著 定価二千円

(内容) ①藤井氏の出自②井原地方の庄園③備中備後守護職④神辺城の攻防⑤藤井皓玄と杉原盛重⑥藤井一族流離

『杉原盛重』

立石定夫著 定価千二百円

(内容) ①杉原保の位置②杉原氏の出自③伯州の神辺殿④盛重の子孫達

☆両書とも八月下旬、市内の書店で発売される予定です。

第八回親と子の古墳めぐり 参加者の皆様へ

篠原 芳秀

この度の古墳めぐりは、いかがでしたでしょうか。朝方の雨もやっと上がり、天候はまずまずだったように思うのですが。

いくつもの古墳を前にして、説明をさせていただきましたが、今、何か一つでも頭の隅に残っているものがありますでしょうか。講師の一人として、どのような成果を得られたのか心配しているところです。

昨年と今年の二つのコース（福山市加茂町・駅家町）は、吉備の中の備後に残る主要な古墳が数多く見学できるところで、一つ一つの古墳がそれぞれ当地方の歴史を考えていく上で大きな意味をもつとともに、我國の歴史の解明にも少なからず関わっています。

このような古墳を見学するのですから、じっくり観察をしていただけたら充分で、説明はあまり必要ないと思う方も思っているのですが、一ついついあれもこれもとつまらぬお話をしたいしました。

昨年のY・INOHARAさんの

感想文（本誌四四号）は楽しく読ませていただいています。講師だった者として、いつ読み返してもその日の様子が思い出され、私の愛読文の一つになっています。その中で、目が止まるのは

古墳のことを色々聞きました
が、記憶にとどまったのは「さんかくぶちしんじゅうきょう」という音の連なりくらいのものでした。

というくだりです。

「今度こそ興味をもたれ、理解していただけるような説明をしなければならぬ」と、いつも想い起こすのですが、なかなか生かされません。反面、一つの音の連なりでも、記憶にとどめていただける説明をしたことは、大変なことかも知れないとも思っています。その人にとって、歴史の扉を開く第一歩になる可能性を秘めているのですから。

発掘調査がおこなわれ、記録類だけを残して姿を消していった古墳を取り上げると枚挙にいとまがありません。多くの古墳がいつでも見学でき、皆で語り合えることを感謝するとともに、こうしたことが、いつまでもできればいいと思っています。最後になりましたが、同行されました役員の皆様、大変お世話になりました。ありがとうございました。

六月例会を担当して

後藤 匡史

五月二日から仕事で四国愛媛県八幡浜の方へ助勤に行っていた。

しかし、六月例会、御幸町史跡巡りを担当していたので一旦帰福した。

梅雨の事期だけに雨だけが心配だったが、その日は朝からカラリと晴渡り上々の天気であった。

五十人乗りのバスも満席で乗れない人は自家用車で追って来た。

最初の高田氏の碑では、加茂川河岸改修工事をやっていたので移転してはと思ったが当地のままで安心し、木下夕爾の生家では夕爾の生前の写真が大きく伸ばしたのを見せてもらい、又夕爾が眠る墓地ではその附近に我々会員の役員をしている栗田氏の先祖の墓があり聞く所によると先祖に神官を代々やっていたと云う。

そこから正戸山々ろくにあるゆるぎ地蔵……

ここで資料に書いてあるイラストでちよっと給が雑に出来てあることを説明、これは五月五日子供の日古墳巡りの下見の時昼食を服部大池の公

園にて一時間ばかりの休そくの合い間に書いたのと、そして古人云わく、あの有名なガリレオ、ガリレイの言葉、我に支点を与えなければ地球を動かして見せる……

それで私に時間と良質の筆を与えたらばもつと良い給を書くであろうと云ったら、それからは熊谷のお叔母ちゃんが私を見ては「ガリレオさん、ガリレオさん」と。

その後正戸山に登り春の下見の時は草も伸びておらず足場も良かったが、初夏を過ぎる頃より草ぼうぼうで昭和天皇統監の碑の上で説明するのがやっとであった。

その後、時間が幾分早かったので近くの亀山古墳、大坊古墳、八幡神社別名陰陽神社等を見て帰路についた。

つづり方狂（教）室

第四弾

。高田氏の居城のあった備中笠岡大宜は、明治二二年の町村制でそれまで大宜村、用之江村、茂平村とこの三村が合併して城見村となったが、その時仲々名前が決まらず三村の長が、その村の一番高い近江山に登り四方を見廻した所福山城が見えたので城見村と名づけた。何：城見村あ

会報四九号原稿募集

。四百字詰原稿用紙五枚以内
。図版、写真は一枚まで
。テーマは会に関すること、身近な史跡の見学記、研究レポート等
。十月末日までに事務局へ御投稿下さい。

会員研究レポート

二つの故郷を結ぶもの

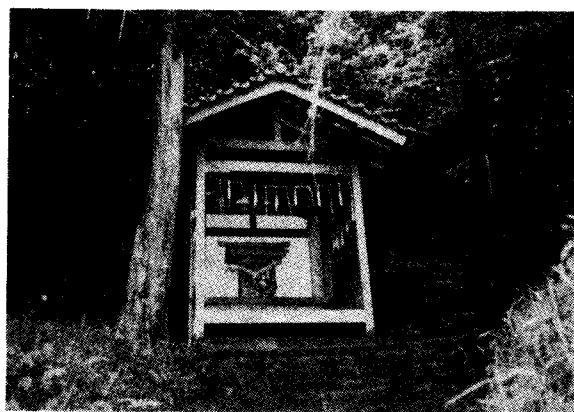
出内 博都

んまりあも城見（面白）みがない。
。夕爾て夕爾（云う字）はどう夕爾（云う字）こんな質問はいけません。何質問はないノ 木下（昨日した）。夕爾の眠る墓地を稲付山と云う。ここは婚約した女性が来たらしい所い稲付（許婚者）。俺をどう正戸こう正戸勝手にしやがれ。
。ゆるぎ地蔵と云うけれどじっとしていて音無し（大人しい）

福山市千田町に住むようになってもう二十年近くになる。生れ故郷の油木町の生家はたまに帰って昔をしのぶセカンドハウスになってしまった。否応なしに千田が第二の故郷になってしまった。自分の生涯を終える土地ともなるとあれこれ詮索してみたい気になって地名や史跡をばつばつ調べている。

そうした中で最も私の心を引くものとして戦国の勇者、入江大蔵正高がいる。入江大蔵は備南の土豪杉原氏の家老として神石郡の多くの山城にその名を残している。入江大蔵の名が残っている山城は三和町父木野の郷集落にある石屋原城、同町桑木の森定城（藩ノ飛山城）油木町小野の小野城などがある。この三城については別の機会にゆずるとして、入江大蔵については西備名区、福山志料などを見てみよう。

西備名区父木野村石屋原山城の項



入江大蔵少輔正高
一本古城記に八尾城主杉原石見守元康家老 天文、永祿之頃居城：入江氏其先は大職冠鎌足公十二世三河守時理の嫡男、駿河守時信初て入江と称す。時信の男右馬允雅清の三男入江権守清定の末葉也。正高後に杉原播磨守盛重の家老となり、武功軍記に載せて顕然たり。
杉原出陣毎に従はざる事なし。
天正六年、播州上月合戦の時、杉原の陣より臺なしの大筒にて城の角矢倉を打崩せり。山中鹿之助是を捕ら

んと軍士を出す。山中勢よく働ききして、臺なしを谷へまくり落とす。
入江兄弟、今田兄弟駈来り、山中の兵を追まくり、是を引上げんとするに、大樹の株に懸り居しを、兄弟共引ければ、株と俱にめけ上れり。扱夫より一方は侍六人して是を持、一方は大蔵一人して持かえると云。
若斯怪力なり。：とあり、福山志料にも同じような記述がある。この大蔵が小野村では入江屋敷、入江谷、入江口などの地名を残している。
この大蔵が：天正年中、杉原播磨守没した後、元盛、景盛に従い。

景盛無道にして元盛を討つによりて、吉川家より景盛を誅せらるの砌り出城し、兄弟共に浪人して備中高屋村に居住し、後又深津郡菟路に住し、此に卒す。則石塔あり、子孫山手村に移り住む。：とある。菟路村の項に：入江大蔵大輔正高墓、同居跡、旧宅の跡、本谷にあり：と出ている。

現在千田町菟路本谷の両側に住宅の並ぶ坂道を二百メートル位登りつめた山麓に小さな祠と、その脇に高さ数十厘の五輪塔がひっそりと鎮座している。地元の人は大蔵さんとして崇め、二十数名の氏子中をつくり祠の改築（昭和六十年）をなし、毎

年旧曆の九月一日に祭礼を行ない、当屋で会食して信仰を深めている。祠の下手に大蔵屋敷と呼ぶ屋敷があるが昔の土豪屋敷の面影はない。

たゞ巾一メートル、長さ約二メートル位の細長い濠があり現在も水をたたえている。この濠で馬を洗ったという話が今も残っている。この濠の下手の石垣は小さな石を野積みにした古い形式のもので当時の息吹が感じられる。なお大蔵屋敷の北西の高所に馬場と言いつた平坦地があるが、今は大部分住宅地になり馬場の面影はない。

あの戦国争乱の時代、中国各地を転戦した豪勇の入江大蔵正高が、備北の山城で威を競った末にこの本谷の一隅にほんとに小さな五輪の墓を残している。怪力豪勇の誉れ高かっただけに一しおあわれを催すものがある。然し幾百人幾千人という戦国勇士の中で四百年後の今日、地域の神として祀られている者が何人いるかを思う時、もって冥すべきかという感慨しきりである。千田に住むようになった、この小さな祠を見つけた時、神石と千田を結ぶものとして言い知れぬ懐しさをいだく昨今である。

『備後の宗教・在地の武士』の出版の紹介

本会参与の堤勝義さんが今度『備後の宗教・在地の武士』という冊子を出版されましたのでご紹介をします。

著者のあとがきによれば、一九七四年（昭和四九）頃から、『文化財ふくやま』や『福山城博物館友の会だより』等を書いてきたものを、著者の記録用にまとめられたとの事。

内容は、第一章備後の宗教、第二章在地の武士から成っていて、第一章は、十九項目からなっている。N生の興味あるものを見ると、「芸備地方における初期真宗について」、「福山志料にみる各宗派別寺院数」、「福禅寺縁起にみえる新庄太郎について」、「備後地方における伊勢神社の進展について」、「法然の弟子浄聞房の流罪地について」、「中世における勧進について」、「三原正法寺所蔵の大般若経について」、「雨乞いの山―龍王山―」、「浄土寺再興の光阿弥陀仏について」、「安部晴明と備後国風土記」等がある。

N生も備後の宗教に関心を持って

いるのであるが、非常に興味深く読ませてもらい、参考になることも多かった。

第二章は五項目からなっている。

(1)渡辺氏について (2)『福山志料』にみる二題―杉原氏と三宝寺― (3)師守記にみる尾道 (4)山内首藤氏と寺院・神社 (5)山内隆通と彼の時代―大内・尼子・毛利の時代を生きた―からなり、「渡辺氏について」では、渡辺氏と泉湧寺の俊祐の關係について書き、渡辺氏の港湾管理者の側面について書いている。「師守記にみる尾道」では、師守記中にみえる尾道と登場人物について書いていて、中世尾道の一面面史であるが興味深い。「山内首藤氏と寺院・神社」は「山内隆通と彼の時代―大内・尼子・毛利の時代を生きた―」は現庄原市を拠点にした山内首藤氏について書いている。山内首藤氏が庄原の甲山に入城以来、寺院・神社をどのように支配していったのかを書いたものと、山内隆通という人物が、大内・尼子、毛利の戦国大名にはさまれて生きぬいていく過程が詳しく書かれていて良かったと思う。

著者の堤さんによれば、印刷をしたものの大半は、図書館等に寄贈したとの事ですが、まだいくらか、残

部が残っているとの事で、ご希望の方には実費でおわけしますとの事です。ご希望の方は、実費一、五〇〇円（送料二〇〇円を含む）を、福山市引野町六三七七番地宛に送って下さい。

事務局 N生

城郭研究部会中世を読む会編 中世を読む第二号発刊

（内容）

山内首藤氏と地毘庄…出内博都
山内隆通と彼の時代
―大内・尼子、毛利の時代を生きた―

……堤 勝義

久代要害について……田口義之
（随想）雨の降る日…佐藤秀子

観応擾乱期の渡辺文書

……小林定市

一冊 一〇〇〇円

（送料二一〇円）

御希望の方は右記金額を添えて事務局までお申し込み下さい。

中世の浄土宗

西山派と鎮西派

堤 勝義

鎌倉時代に法然が創唱した浄土宗は、今日では六派にわかれている。

- (1) 浄土宗（総本山・京都智恵院、大本山・東京増上寺等）。(2) 黒谷浄土宗（大本山・京都金戒光明寺）。(3) 浄土宗捨世派（大本山・京都一心院）。(4) 浄土宗西山深草派（総本山・京都誓願寺）。(5) 浄土宗西山禅林寺派（総本山・京都禅林寺―通称永観堂―）。(6) 西山浄土宗（大本山・京都乙訓郡光明寺）。である。
- (1) 浄土宗 (2) 黒谷浄土宗 (3) 浄土宗捨世派は、法然の弟子聖光坊弁阿の鎮西派からわかれたもの。
- (4) 浄土宗西山深草派 (5) 浄土宗西山禅林寺派 (6) 西山浄土宗は、法然の有力な弟子であった証空の西山派からわかれたものである。

法然の弟子はたくさんいたが、親鸞は法然から離れて、後の浄土真宗の元を作っているのです、此の二派が主流になっている。

今日の浄土宗寺院を広島県内にみると、県内では浄土宗派が多数を占

めているので、少数派の西山派の方をあげてみると、広島市では、西山深草派が三寺院、西山禅林寺派が一寺院である。尾道市には西山禅林寺派が三寺院（持光寺、宝土寺、光明寺）あり、比婆郡東城町に西山深草派が一寺院（四方寺）ある。

法然は天台宗の学僧であり、智恵第一といわれたともいう人である。

法然は南無阿弥陀仏の念仏を撰択して、布教をしていった人であり、法然の遺説ともいうべき。一枚起請文には、「往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑なく往生するぞ」と思いとりて申す外には、別の子細はなく、念仏を信ぜん人は、たといい一代の法を能く学すとも、一文不知の愚とんの身になして、尼入道の無知のともからに同して、智者の振舞をせずして、ただ一向に念仏すべし」とあり、往生を願ってひたすら念仏に専修すること、念仏を修せん人は、よく学問をつんでいても、智者のふるまいをせず、ただ一向に念仏をすべきことを説いている。

但、法然の場合は弟子の親鸞のように徹底して他力、阿弥陀にすがるということでなく、天台僧としての一面を持っていたものと思われる。

西山派は最初法然の有力弟子証空

がいることにより、智恵院を占めていたが、後に鎮西派が有力となり、鎮西派にとってかわられることになった。

証空の西山派は、一類往生説を立てる。「一類とは念仏で、念仏は本願であるから往生の因となるが、本願でない諸行は往生の因とはならない。阿弥陀仏が正覚以前に立てた誓願を既に完成して仏となっているので、衆生の往生も既に成就していることになる。我々衆生は往生することになるので、我々衆生は往生しているのに、我々はそれを知らずに迷っているのであるから、もし我々がすでに悟っているものであることを深く信ずる時には、我々の為に成仏した阿弥陀仏の徳力が現われて来るのであって、従って念仏のいわれを領解することは、すなわち往生するのである。」

念仏のみが往生の正因となるのであって、諸行は往生の正因とはならない。念仏をとえて往生することが出来るのは、阿弥陀仏がすでに誓願をして仏となっているので、衆生の往生もすでに保証をされているのだ。但、私達はそれに気付かないだけなのだ。それゆえ、此の事を領解して、念仏を説えるならば、往生は

おのずと保証をされるのである。これが西山派の一類往生説である。

一遍の時宗は、証空の弟子の証達が一遍の師であるので、西山派の影響を強く受けている。

余談であるが一遍の場合は、「阿弥陀仏が正覚をえて、往生がすでに保証されているのであるから、念仏を信じようと、信じまいと賊算（南無阿弥陀仏の念仏札）を渡せば、受け取った人は、往生が保証されるのであるとなる。」西山派の一類往生説をより易にしていることがわかる。

聖光坊弁阿の鎮西派は、二類各生説を立てる。聖光坊は九州の筑紫の人で、法然晩年の六年間の弟子である。

二類各生説は「阿弥陀仏の本願はただ称名念仏の一行を選んで、凡夫往生の正業としたのであるから、念仏を唱えて往生を願う者は、本願の力で弥陀の訪土に往生出来るが、他の諸行は本願ではないから、一旦その方向を転じて往生を願う行としなければならず、往生を願う行でも往生出来るのである。」念仏と諸行の二類の往生を認めるのである。

阿弥陀仏が、称名念仏の一行を選んで、凡夫往生の正業としているのであるから、念仏を唱えて往生を願

う者は、本願の力で往生出来るのは当然である。諸行についても、行そのものでは往生は保証されていないが、往生を願う行を行なうならば、行でも往生が保証されるのであると。念仏と諸行を認めているのである。

このように、法然の弟子の中で、すでに、往生の保証についての考え方がちがってきているのである。

私達は浄土宗という法然の創唱したものと考えられる場合が多いのではないかと思うが、その弟子、孫弟子になってくると、派によってかなり、教義上の相違が出てくるのである。それゆえ浄土宗△△派と宗派を確認する必要があるのである。日蓮宗や浄土真宗等においても同様であり、お寺巡り等の場合には宗派を確認をし、その歴史的背景を考える必要があるのである。

鎮西派が現在のように隆盛するのは、聖光坊弁阿の弟子良忠の力が大である。良忠は、北条氏一門の大仏氏の帰依を受け、鎌倉に悟真寺（現在の光明寺）を建て、勢力を伸張していった。

日蓮の北条氏による瀧ノ口の弾圧にも、積極的に干渉をしている。

以上の事を前提として、備後地方の浄土宗寺院として、沼隈郡山南の

悟真寺をあげてみたい。

沼隈郡山南の悟真寺は良忠の開基といわれている。「沼隈郡誌」によると、「昔は光明院という天台宗であつたが、良忠が筑後からの帰りに当院に留賜し、教化して寺を浄土宗に改めた。後無住となつたが、鎌倉光明寺七世の聖誉上人が再興し、悟真寺を名乗つたという。」後には、山南を領した渋川氏も帰依したという。沼隈郡の山南は、浄土真宗明光派も、鎌倉の最宝寺とかかわり深く、関東の鎌倉と深いつながりがあつた。

山城志第八集

原稿大募集！

- ・ 期日は七月末日まで
- ・ テーマは歴史に関するレポート、論文、随想など
- ・ 写真、図版 二、三枚以内
- ・ 四千字詰原稿用紙五十枚以内
- ・ 投稿先は事務局です。

歴民研部会の探訪に

参加して

サツキの寺の安楽寺

小島 袈裟春

それは目崎のバス停で降り立った時から見へて居た、「あれかな？」とも思ったが「一寸違うな？」と云う気もした、「あれではない方が良いな」と云う方が正確だったかも知れない、何となくサツキの寺、と云うイメージに合わない様な感じがしたからである。

近くを種本部会長が歩いて居たが聞くのは何故かためらわれた。十分程歩いて汗が出始める頃、一寸した駐車場があつて、種本さんが「ここです」と云つた、見上げると茶色に塗つたコンクリートの舞台の上に朱色の柱に白壁の色鮮やかな真新しいその建物に乗って居た。一息入れて改めて正面に続く長い石段の下から見上げると、こんもりとした両側のサツキの風情が急に消え失せて、鮮やかな朱色のみが強烈に眼前に迫つて来るのであつた。石段の途中に大きな看板があつて、弘法大師一千五〇年遠忌を期して長い間、寺の悲願

であつた本堂の再建を発議した旨の趣意が、予算八千数百万円の数字と共に掲示してあつて、慶長六年（一六〇一年）に焼失したまゝの本堂建立の意味が分つたのであつた。

さて石段の途中から左の道に折れると途端に辺りの風景が変つた。喧噪から静寂へと転換であつた。苔むした石垣、良く手入れされたツツジやサツキが清々しく、境内を割って流れる谷川のせゝらぎも、何かいなく有り気にしつとりと風影に溶け込んで居るのであつた。府中商工会議所の説明文によれば、江戸初期の住職が下流の農家の旱害を心配して寺の裏手に自力で造つた溜池からの流れで、寺と農民との関係を物語る歴史的証拠でもあつた。更に右に古い石段を登り始めた時、元気の良い男の声が聞えて中年の坊さんの後姿が見えた。私は一瞬「オヤ」と思った。私は知つて居たのである……中年の坊さんの居る筈はない事を……何日か前の新聞に載つて居たこの寺に関する悲しい出来事の記事を……それをここに書くのは心が痛むけれど新聞にも載つたのだからその要点を引用させて頂くと、寺の住職さんは大分以前から境内にツツジやサツキを植えて今は三百種、三千本に

達した。そして市内はもとより、広く各地に「サツキの寺」とし知られる様になった。住職さんには一人の息子さんがあって修業中であつたが今は有徳の僧に成長し、今年（一九九〇年）は戻って寺を継ぐ事に決つて居た。それが何んとした事だ、その直前最後の修業中に急逝してしまつた。住職さんはすでに八十才余り、名物のサツキの手入れも今年からは二人で楽しくやれる筈であつたのに……一度は氣落ちした住職さんであつたが、今年もサツキを見に来る人達のために恒例のサツキ祭りを実施する。……と云う内容であつた。

私はずっと以前から一度この寺を訪ずれて見度いと願つて居たので、今回の探訪を楽しみにして居たのだが前述の新聞記事を読んで何か浮世の儚さを見る思いがして一時は止め様かとしたのですが、それはとも角私の「オヤ」と云う感じはまだ続いた。石段を登り切った所に萱葺き屋根の広い建物があつて吹き払つた様に開け放された広間には客を迎える様な準備が進行中で、その真中に立つた老僧が何か云うのに若い僧が「はい」と元気に答え忙がしそに働いて居た事であつた。我々が近づくのを見て入口近くに出て来た老僧

を見て私はすぐ「ア、この方だ」と思った。男でもない女でもない「蔵たけた」と云う、云いかたがびつたりする一種の氣高さを墨衣に包んだその方は我々の挨拶に一々会釈されて居られたが、何か胸に涙をのみ込んで居る様にも見えた。種本さんの話では、明日の行事の準備中なので御話しは出来ないが拝観は御自由に、との事であつた。新築の本堂の舞台に登つた所で誰かが「明日は息子さんの四十九日忌と云う事です」と云つた……。そうだったのか……。

物を見ると本心に心が落着く、その旧本堂の裏手から向つて右側に広がる池には屋根付きの橋が架つて右の弁天堂に続く、先程の谷川は池から弁天堂の下を潜つて流れ出て居るのであつた。旧本堂の裏山も一面のツツジ、サツキで中腹にやはり萱葺きの茶室風の小堂が見える。右側山手の荒神社の前の大木の並ぶ辺りから見ると池を中心とした眺めは、年月が育くんだ素朴でそれで居て調和の取れた名園であつた。そしてあの萱葺き屋根の旧本堂が何時までも残る様願うのみでもあつた。新本堂の舞台からの眺めも仲々のものである。

そして頼りにして来た息子の忌日の指揮をとる老僧の胸の内を、さぞやと思つたのであつた。

そうだ安楽寺の影観に戻ろう、先程、老僧達の居た萱葺き屋根の、廻り此に瓦を乗せた優雅な建物は最近新本堂が完成するまでの四百年近い歲月、本堂として使われて来たとの事であつた。元は庫裡との伝もあるが、慶長の大火災で全建物が焼失し、後元和元年に再建して本尊の薬師如来を安置した、と云うから仮本堂としての意味でもあろうか。その向つて左横に接続して庫裡らしい建物がある。これも萱葺き庇瓦で、私の生家が萱葺きだった故か、こう云う建

それは、六波羅蜜の第一の「布施」に關してで私は一般的に三施と云う財施、法施、無畏施とのみ單純に理解して居たのだが、住職さんは「影観施」の事を云われた。これは法施と無畏施に深く關係し寺側としては重要な事項となつて居る、と云われた。私はそれまで寺が仏像とか建物等とはとも角、庭や美術品などに大金を投ずる事に、やゝ割り切れぬ感じを持つて居たのであつたが、そこでやつと得心したのであつた。

「影観施」何んと氣持ち良い言葉ではないか……安楽寺の老僧もそれ故にサツキの寺を、舞台付きの新本堂を造り上げたのであろうか。……それにしても、この世はまゝならぬものである。……この世のすべての存在はその本質において清浄である、（前出のお経より）、般若理趣經の内容の、何んと現実肯定的である事か、生もそして死も……私は朱塗り白壁の真新しい本堂の舞台から手伝いの僧侶を指揮して境内を走廻る老僧の姿を何時までも目で追つて居たのである。

夜更かし考

佐藤 秀子

どうしても眠れない夜が月に二、三度はある。叔母や友人の霊が遊びに来ているのだろうか。姿をみせてくれたらいいのに、会いたい人達である。

夜更けに本箱にもたれてばんやりしていると本達のささやきが聞こえてきそう。

わたしの好きな本は日本史ではなく『沈黙の世界史』という十三巻の全集本で二十年前に発行され、一冊五百七十円（今だと千五百円くらい）オリエント・ギリシャ・ローマ・中国・日本・新大陸・ヨーロッパ等々、全世界の文明の発掘、又、解明に至るまでの幾多の人々の情熱と執念をくわしく書いてあり、シュリーマンのトロイ発掘やカーター博士がツタンカーメン王の墓に入った時の歓喜の様子や、宝物の位置の見取図がわたしをも、その場に居合わせた様に、いつも留め処ない想いをみさせてくれる。このうちの何冊かは友人に指定して誕生日プレゼントとして送ってもらった為、四巻が二冊ある。

わたしが買った後に送ってきたからである。友人からもらったものを気が持がもっているものとして読んでいるから一冊はまだ新品のままで、なんだか可愛そうな気もする。

若い時に買った本は思わぬところに、わたしの独り言が書いてあつてなつかしい。葉隠なぞという本も二十才頃に読んでいて、感傷にふけつた大胆な意見が青インキで書いてあり他の人には見せられないなと苦笑い。

日中は、ものも本性を現わさないのだが、夜、じつとみていると目や心がみえてくる。静けさの中であちこち観察するのも面白い。灯りを少し暗くすると電話がひとりでに鳴りだしたり、観葉植物が枝をゆらせた、大好きな宮沢賢治が銅青の空を飛んできて、ドアをノックしているような気もする。だんだん夜更けに近づいてゆく一分一分は楽しい。

遺品展や遺作展も本当は夜が更けて見れば彼らが語りかけてくれるに違いないと思う。日中は人間達の体臭や、とりとめもないお喋りに満ちていて、とても意志は通じない。気の合った友か、そうでなければ一人で、ゆっくりと眺めてみたいものだ。

雨の音を聞きながら例のごとく、ばんやりしていると、ものになってしまいうのである。与えられた定位置でじつと過ごすのでもいい、何もしないで煩づえをついて見るだけなのもいい。ずーっとこのままがいい。

うつし世は夢という乱歩の随筆があるが、題がとても好きである。人形に恋して毎夜、蔵の中に忍んでゆく……こんな小説を書く人には似合っている。この世が夢だとしたら夢でないのは来世か、それとも魂は永遠で現世は仮の姿だからか。この世での成功と名誉は、まさにうつし世の夢、はかないものである。せめて夜なりとも、正気に戻って夢をみてみたい。

夜更けに読む歴史の本の記述も、遺跡も、うつし世は夢さ……とばかり、風化して夢の中へ帰ってしまうのだ。

事務局日誌

四月八日 親子古墳めぐり下見

参加十三名

四月三〇日 古墳めぐりの準備会

参加八名

五月五日

第八回親子古墳めぐり

参加一〇三名

五月二六日

事務局会議 参加八名

六月十日 御幸町の史跡めぐり

後藤匡史担当

参加五四名

六月二三日 役員会

参加十一名

平成二年度下半期

行事予定

七月二九日（日）於湯殿

徹底討論「邪馬台国はどこだ」

九月九日（日）講演「藤井一族の興亡」

講師 立石定夫先生

九月二・三・四日 秋期一泊旅行

十月七日（日）講演「川口干拓史」

講師 松浦薫雄先生

十月十四日（日）鳴方史跡めぐり

種本担当

十月二八日（日）豊松史跡めぐり

出内担当

十一月十一日（日）古墳めぐり

網本担当

十二月二日（日）山城めぐり

田口担当

備陽史探訪の会事務局

〒720 福山市多治米町

五一一九一八

田口義之方

☎〇八四九一五三一六一五七